

アンネマリー・シュヴァルツェンバハにおける反ナチス — エーリカ、クラウド・マン、そして山との関係 —

武田良材

1. エンガーディンの闘士

1944年7月20日、軍人たちの実行した、総統アドルフ・ヒトラーを爆殺してクーデターを起こす計画が失敗に終わった。数あるヒトラー暗殺計画のなかで最も有名なこの7月20日事件で、元帥、大将を含めおよそ千五百名が逮捕され、その内およそ二百名が処刑された。処刑された一人、アルブレヒト・ハウスホーファーの遺体から、拘留中に書かれた一片の詩が見つかっている。刑務所の名前を取って「モアビート・ソネット」と題されたその後半を紹介する。

そして君は夢の中でぼくを確かめる。

夢の中では、もう痛くも

悲しくもなかった。

君はうなずいて、囁く。もう治った？

ぼくは静かに横になっている。静寂の中で心臓が鼓動する。

残っている — 感謝の気持ちが。

その感謝はきっと

エンガーディンにある君の墓から引き出されている。¹

エンガーディンとはスイス東部、ベルニナ・アルプス麓のサンモリッツの町を含む大きな谷で、「君」はこの谷を拠点にし、先にこの世を去っていた作家・フォトジャーナリストのアンネマリー・シュヴァルツェンバハ（1908－1942）を指す。地理学者ハウスホーファーはかつてシュヴァルツェンバハとの結婚を望み、1929年にも詩を贈ったことが知られているが、友だち付き合

¹ Georgiadou, Areti: „Das Leben zerfetzt sich mir in tausend Stücke“. Annemarie Schwarzenbach. Eine Biographie. München 1998, S.102.

いを超えることはなかった。² 拘留され、暴行を受け、銃殺を待つ境遇に置かれた彼が、恋人でも親友でもなかったこの女性を想ったのは、彼女が印象深い反ナチスの闘士だったからではないだろうか。彼がここで彼女の代名詞に用いたエンガーディンを絡めて、すなわち山との関わりに注目して、反ナチス作家アンネマリー・シュヴァルツェンバハの人物像を浮き彫りにするのが本稿の課題である。

このような課題を設定する理由は、後世の彼女についての評価が低かったことにある。トーマス・マンとその子どもたちエーリカ、クラウスらが彼女を愛したので、知名度こそあれ、彼女の果たした役割についてよく知られているのは、クラウス・マンの亡命雑誌「集合 (Sammlung)」の出資者であったこと、「胡椒挽き」事件³の原因となったことの二点くらいである。後者は彼女が直接関与していないので評価と関わりがなく、前者については金持ちの道楽と理解している人が多いだろう。その通りの認識でなかったとしても、片手間に手伝った程度と考えることがすでに彼女を過少評価していることになる。

文芸雑誌「集合」は商業的に失敗したとはいえ、亡命者に表現の場と原稿料を提供し、隔月で発行される一万部が毎号四日足らずで売り切れた、亡命文学を語る上で最も重要な雑誌である。その発案者は実はクラウス・マンでも、出版人フリッツ・ランツホフでもない。シュヴァルツェンバハの親友クロード・ブルデュが着想し、シュヴァルツェンバハは独仏両語併記にしたいと構想を膨らませ、その計画を聞いたマンが乗り気になって実現したという経緯があった。シュヴァルツェンバハはフランス語の出版社を確保するため努力したが徒労に終わり、ランツホフが共同出資者であるオランダのクウェーリト社からドイツ語のみで出版された。シュヴァルツェンバハの親は大富豪だったが、ともあれ「集合」に出資するために彼女は稼がねばならなかった。そればかりか両親はナチスの支援者で、「集合」の計画を聞いた父親は「ナチスに協力するように」と書き送ってきた。つまり彼女の反ナチス活動は、金持ちの道楽などでなく、主体的なものだった。亡命文学研究の側から見たときの彼女の魅力はその社会参加にある。

アンネマリー・シュヴァルツェンバハ個人の魅力は語り尽くせない。少年を思わせる容姿、詩情あふれる文章、富豪令嬢の自由奔放さ、政治参加、同性愛、麻薬中毒、自分探し、アメリカ、

² Miermont, Dominique Laure: *Annemie Schwarzenbach. Eine beflügelte Ungeduld.* (Übersetzt v. Susanne Wittek) Zürich 2008, S.54ff.

³ 「胡椒挽き」事件についてはトーマス・マンが1934年11月17日の日記に詳しく記しているのでもそこそこ知られている。ただし注釈を含む邦訳の情報は、共産主義者とみなされたエーリカ・マンへの右翼組織による攻撃という表立った面のみであり、シュヴァルツェンバハ家が嘘のレッテルを貼ってまで特にエーリカを目の敵にした理由、すなわちアンネマリー・シュヴァルツェンバハとこの事件の関わりについては説明されていない。そのため日記のこの箇所を読んでも事件のことは不可解である。真相については後述する。トーマス・マン『トーマス・マン日記 1933-1934』(岩田行一 他 訳) 紀伊國屋書店 1985年、592-593頁。

ソ連、イスラエル、イラク、イラン、アフガニスタン、インド、アフリカへの旅、それもしばしば自ら車を運転し、テントに寝泊まりしながらの冒険。これほど多彩に魅力を放つ人物は稀ではないだろうか、少なくともドイツ文学研究の対象としては。

シュヴァルツェンバハは際立った特権階級に属していた。父親はスイスでも有数の資本家、母方祖父は第一次世界大戦時のスイス陸軍大将、母方祖母は鉄血宰相ビスマルクの従姉妹、両親のサロンにゲーアハルト・ハウプトマン、リヒャルト・シュトラウス、ヴィルヘルム・フルトヴェングラー、アルトゥーロ・トスカニーニ、ブルーノ・ヴァルター、ヴィルヘルム・バックハウスといった鬼才たちが訪れる文化的環境に育った。成績がよく、チューリヒ大学博士号を取得している。フランスの外交官と結婚したが、夫婦そろって同性愛者で、お互いを束縛せずに済んだ。家柄と莫大な資産、高い教養と優秀な頭脳と鋭い感受性、文才とピアノ演奏とダンスの才能、外交官特権、自由、さらに美貌まで彼女は備えていた。

しかし、幸せな人生を謳歌するに十分過ぎるこれらの特権を、彼女はナチスとの闘いに注ぎ込み、疲れ切り、心身を荒廃させた末に、34歳でこの世を去っている。何を考えそのように生きたのか、それを知りたいと思う人は少なくない。

シュヴァルツェンバハの反ナチス性については Areti Georgiadou がすでに 1994 年の博士論文「遊牧民の逃路 — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの世界 — 生涯と作品研究」⁴ で議論を展開し、シュヴァルツェンバハが真剣に政治と向き合っていたこと、エーリカ、クラウス・マン姉弟との見解の相違からその真剣さが十分に理解されなかったこと、さらにシュヴァルツェンバハ自身の理解ではナチスの影響下からの脱出もナチスとの対決だったことを解き明かしている。これはそれまで影響力のあった Charles Linsmayer による伝記 — 1987 年に再刊されたシュヴァルツェンバハの長編小説『幸福の谷』に Linsmayer が編集者として添えたもの⁵ — での金持ちの道楽というイメージを打破する画期的研究だった。そして再刊に値する著作は『幸福の谷』だけと考えた Linsmayer の判断を否定するかのように、シュヴァルツェンバハの著作は次々に出版されてきた。近年はシュヴァルツェンバハ家の Alexis Schwarzenbach が親族の強みを生かして、誤解されてきた母娘関係の深層を暴き出し、シュヴァルツェンバハ研究の分野で

⁴ Georgiadou, Areti: *Fluchtwege einer Nomadies. Die Welt Annemarie Schwarzenbachs. Eine Untersuchung zu Leben und Werk*. Universität Frankfurt (Dissertation) 1994.

⁵ Linsmayer, Charles: *Leben und Werk Annemarie Schwarzenbachs. Ein tragisches Kapitel Schweizer Literaturgeschichte*. In: Schwarzenbach, Annemarie: *Das glückliche Tal. Roman. Mit einem biographischen Nachwort von Charles Linsmayer*. Frauenfeld 1987, S.159-224. シュヴァルツェンバハ生誕百年を機に、若干の修正を加えて単独で出版された。Linsmayer, Charles: *Annemarie Schwarzenbach. Ein Kapitel tragische Schweizer Literaturgeschichte*. Frauenfeld 2008.

最も影響力ある研究者となっている。⁶ 他方で、クラウス・マン研究者でもあるスイス・フランス語圏の Dominique Miermont (Grente) は 1989 年と 2004 年に伝記を出版し、⁷ Alexis Schwarzenbach よりも客観的なシュヴァルツェンバハ像を提示している。

以上のようにシュヴァルツェンバハ研究は最近二十年ほどで急激に発展してきた。⁸ 2008 年 5 月をもって生誕百年を迎えた今、現在のシュヴァルツェンバハ像をまとめる作業が必要であろう。しかし従来の研究には欠落がある。この間のパレスチナ問題やアフガニスタン戦争、イラン・イラク戦争、湾岸戦争、今世紀の対テロ戦争を背景にセンセーショナルな中東に研究者の注目が集まり、その他の地域での彼女の活動と彼女の思想との連関を解き明かすことは疎かにされがちで、山との関わりも具体的な事実が紹介されるばかりだった。本稿では彼女の反ナチスのあり方を理解する一つのアプローチとして、エンガーディン谷など、山の果した役割を考える。というのも、彼女はワンダーフォーゲルで批判精神を培い、エンガーディン谷のシルスに反ナチスの仲間たちが休暇を過ごす「獵師の家 (Jägerhaus)」を用意し、自らもそこで英気を養って世界へ飛び出たわけで、山は反ナチス作家としての彼女の拠点だったからである。それに例えばワンダーフォーゲルといえば日本でも 1930 年代にもたらされたナチス時代の遺物だが、本場ドイツにおいては「血と土」の思想に容易に溺れ捕られてしまった負の歴史を抱えていて、ワンダーフォーゲルとナショナリズムの結び付きが本質的であるかのような、筆者にとって残念なイメージがあるのだが、シュヴァルツェンバハならば逆にワンダーフォーゲルと反ファシズムの関わりのある様を教えてくれるだろう。

2. 美しい人

⁶ Alexis Schwarzenbach の著した次の伝記は今後のシュヴァルツェンバハ研究で、最も重要な資料となるに違いない。Schwarzenbach, Alexis: *Auf der Schwelle des Fremden. Das Leben der Annemarie Schwarzenbach*. München 2008. 「誤解されてきた母娘関係」とは、例えば母親が娘の同性愛傾向を抑えようと、または隠そうと必死になり、それを巡る母娘の対立があったというような解釈。Alexis Schwarzenbach は母親自身が隠し立てしない同性愛者で、母娘は強い愛情で結ばれていたことを明らかにしている。後述するように、強く愛し合うがゆえに葛藤が生じたのである。この件については次の論文を参照のこと。Schwarzenbach, Alexis: „Der Anfang aller Dinge“. Annemarie Schwarzenbach und ihre Mutter Renée Schwarzenbach-Wille. In: Fähnders, Walter / Rohlf, Sabine (Hrsg.): *Annemarie Schwarzenbach. Analysen und Erstdrucke. Mit einer Schwarzenbach-Bibliographie*. Bielefeld 2005, S.21-43.

⁷ Grente, Dominique / Müller, Nicole: *L'Ange Inconsolable. Une biographie d'Annemarie Schwarzenbach*. Paris 1989. Miermont, Dominique Laure: *Annemarie Schwarzenbach ou le mal de l'Europe. Biographie*. Paris 2004. 後者は Alexis Schwarzenbach の伝記に図版の豊富さで及ばないものの、内容の充実度は勝るとも劣らない。

⁸ Aisthesis 社が註 6 の Fähnders / Rohlf (2005) から間を置かず再びシュヴァルツェンバハ論集を編んだことがシュヴァルツェンバハ論の盛り上がりを象徴しているだろう。Decock, Sofie / Schaffers, Uta (Hrsg.): *inside out. Textorientierte Erkundungen des Werks von Annemarie Schwarzenbach*. Bielefeld 2008.

シュヴァルツェンバハといえば、まずその容姿が目を引く。『チボー家の人々』の作者ロジェ・マルタン・デュ・ガールが1932年の『アフリカ秘話』に「アンネマリー・シュヴァルツェンバハに捧げる、あなたが慰めがたい天使の美しい顔でこの地上をさまよっておられることに感謝を込めて」という献辞を添えて彼女に贈ったことは、クラウド・マンの自伝『転回点』（第七章）で紹介されたことから有名な逸話である。この美しさはシュヴァルツェンバハ研究の動因ともなってきた。

1987年のシュヴァルツェンバハ再発見を受けて書かれた最初の伝記、Nicole Müller、Dominique Grente 共著の『慰めがたい天使 — アンネマリー・シュヴァルツェンバハの安らぎのない生涯』（1989）は、「始まりは…写真でした。」という印象的な書き出しで、1987年春の「アルターク（Alltag）」誌の表紙を飾ったシュヴァルツェンバハの顔に心奪われたことから語り始める。

この写真は抗いがたく惹き付け、注意を引き、問いを呼び起こし、要するに、信じられない魅力を放ちました。誰かが写真を強奪しようと本屋のショーウィンドウを打ち割ったとか。あり得ます。いずれにせよ写真が私たちを強奪したのでした。

とにかくこの写真を見て下さい！ 一体どうして、この繊細に造形された顔の独特な美しさと、眼差しから放たれる計り知れない哀しみとから逃れられるでしょうか！⁹

熱狂調がまた続くが割愛する。この写真というのは写真家マリアンネ・ブレスラオアーが撮影したもので、Areti Georgiadou の前述の博士論文は、この写真 — 彼女自身にとっては再刊された小説『幸福の谷』の表紙写真 — がブレスラオアーによって撮影された状況を解明するところから話を始める。この論文には対談がちりばめられていて、それがシュヴァルツェンバハの人柄を巧みに浮き上がらせるのだが、ブレスラオアーの話題の前に挿入されたマルゴ・フォン・オペル¹⁰ との対談では写真の魅力が弱調されている。

A.G. : どうして私が彼女について書くのかと、質問されたことがありますよね？

M.v.O. : ええ。

A.G. : この写真を見て、これがとっても素敵だと思ったんです。

⁹ Müller, Nicole / Grente, Dominique: *Der untröstliche Engel. Das ruhelose Leben der Annemarie Schwarzenbach.* (Übersetzt v. Eliane Hagedorn / Barbara Reitz) München 1995, S.7.

¹⁰ 晩年のシュヴァルツェンバハと親しかった人物。夫は自動車会社オペルの創業者の孫で、「ロケット・フリッツ」の異名を持つフリッツ・フォン・オペル。フリッツは持株の全てをGM社に譲渡して亡命した。

M.v.O. : あら、どうして？¹¹

シュヴァルツェンバハの弟ハンス（ハズィ）の孫である Alexis Schwarzenbach は、写真集『ルネ・シュヴァルツェンバハ＝ヴィレ ― 説明文付写真集』（2005）の編集後記にこう記す。

写真を見て、私は 13 歳の大伯母アンネマリーの顔に魅了されてしまったのです。およそ 15 歳のときに初めてその写真を見て、まさにそのとき、彼女の作家、ジャーナリストそして写真家としての業績を再発見しました。他の多くの人たちと同様、私もアンネマリーの息を呑むほどの美しさの虜となりました。私は彼女と写真の中の別の人物たちとを繰り返し見比べました。彼女の母親ルネ、弟フレディとハズィ、姉ズツァンネ、それに従姉妹グンダレナと。こんなにも美しい人がこの家族に現われようがあるというのが不可解でした。¹²

見る人にこうも衝撃を与えるのは単なる美しさではない。女とも男とも違う曖昧な妖しさである。それともう一つ。シュヴァルツェンバハはレンズに自然体で向き合うことができた。それらの秘密は彼女の家庭にある。

3. 令嬢の生い立ち

シュヴァルツェンバハの母親ルネは家族の写真を撮ってアルバムにまとめるのを趣味としていた。彼女は 14 歳から死の直前まで六十年以上に渡って撮り続け、アルバムに整理された写真だけでも一万枚を超え、16 mm フィルムも十時間分以上残されている。もちろんその陰に、アルバムに入れられなかった、あるいはプリントされなかった写真が存在する。それだけの量を 1883 年生まれのアマチュアが撮影したというのは特筆すべきことである。この女性の娘としてシュヴァルツェンバハは撮られるのに慣れていて、彼女の持つ雰囲気写真にそのまま収まること、それが彼女の写真が人々を魅了する理由の一つである。

これだけ写真にのめり込めたのだから、ルネは自由な人だった。さらに奔放という言葉は足した方がよい。乗馬の腕もスイス代表になるほどの名手だった。ちなみにシュヴァルツェンバハの弟ハンスは 1960 年ローマ・オリンピック乗馬団体の銀メダリストである。ルネは男装を好み、若い頃から女性への愛を公言した。ヴァーグナー歌手のエミー・クリューガーと恋仲で、それは不倫だったのだが、エミーを家族の一員として扱わせた。

¹¹ Georgiadou (1994), S.1.

ルネの夫で、シュヴァルツェンバハの父親のアルフレートは控え目な人で、妻の不倫を容認し、折に触れて新しいカメラをプレゼントして妻を喜ばせた。二人の間には子が五人いて、シュヴァルツェンバハは第三子である。法学博士の聡明な父親と活発で音楽好きの母親、その双方の長所を取り込んで、シュヴァルツェンバハは学問でも、乗馬でも、写真でも、ピアノやダンスでも非凡な才能を発揮した。また、父親の経済力は巨大なもので、絹の工業家としてイタリア、フランス、ドイツ、アメリカに工場を、ロンドン、リヨン、ベルリン、ニューヨーク、ミラノに販売店を展開し、およそ一万三千人の従業員を抱えていた。

このように恵まれているシュヴァルツェンバハを束縛したのは、自由を謳歌する母親だった。その始まりは早い。小学校に通い始めてほんの数週間後に猩紅熱で臥せった娘を、それを機に付き切りになったルネは、治癒後も虚弱を理由に二度と小学校にやらなかった。シュヴァルツェンバハの姉ズツァンネは妹への依怙最良を、母親の似姿 (Ebenbild) だったからと説明する。¹³ 同性愛者のルネにとって、同じ傾向を持ち、¹⁴ 外見も、やんちゃな性格も少年のような娘は愛し過ぎる対象で、娘の親離れは認められなかった。家庭教育は実に 14 歳になるまで続いた。幸いその後ギムナジウム卒業試験 (1927 年秋合格) まで学校で学び、ワンダーフォーゲルに参加することも、同級生の女の子に恋することもできた。その頃の寮生活などは処女長編小説『ベルンハルトの友人たち』(1931) に描かれている。

大学へは従姉妹のグンダレナと共に通った。1927 年の冬学期から始め、チューリヒでの二セメスターの後、ソルボンヌで二セメスターを過ごして¹⁵ またチューリヒに戻り、その間に歴史、文学、哲学、心理学などを学んだ。すらりとした 176 cm の長身にエレガントな服をまとい、立ち居振る舞いも貴族的、自分で車を運転して通学し、顔は性別不詳、という学生だったから、学生たちの視線を集め、彼女を「殿下 (Ihre königliche Hoheit)」と呼ぶ学生たちもいた。さらに若干 23 歳にしてチューリヒ大学博士号を得て、¹⁶ その直後に処女長編小説を出版する。

この驚異的な学生が、さらに上に行く女性と出会い、社会のあり方に目を向けさせられる。その女性とは、奔放な女優エーリカ・マンである。シュヴァルツェンバハは 1930 年 9 月にミュン

¹² Schwarzenbach, Alexis (Hrsg.): *Renée Schwarzenbach-Wille. Bilder mit Legenden*. Zürich 2005, S.155.

¹³ Georgiadou (1998), S.35.

¹⁴ 1925 年にシュヴァルツェンバハは女性にしか恋愛感情を抱けないことをワンダーフォーゲルを指導していた牧師エルンスト・メルツに告白している。Müller / Grente (1995), S.39.

¹⁵ 家からの解放を意味したが、完全に自由ではなく、従姉のグンダレナとエリザベートの二人が同伴した。

¹⁶ 異常に早い博士号取得と、博士論文と同時に処女長編小説を執筆していた事実から、富豪令嬢への優遇措置があったのではないかという疑いが生じてくる。Kurt Wanner はシュヴァルツェンバハの行った研究が先進的なものであり、その論文が歴史学の分野で現在もその価値を失っていないことを報告している。Wanner, Kurt / Breslauer, Marianne: „wo ich mich leichter fühle als anderswo“. *Annemarie Schwarzenbach und ihre Zeit in Graubünden*. Chur 1998, S.21f.

ヘンでエーリカと知り合い、12月にはその弟クラウスとも仲良くなった。マン姉弟はシュヴァールツェンバハの兄ローベルト＝ウルリヒ、姉ズツァンネと同じ年頃で、¹⁷ マン家（母方はプリングスハイム家）は上流に属したし、さらに二人の父親トーマス・マンが1929年にノーベル文学賞を受賞していたので、金も名誉もあって、加えてコスモポリタンな文学青年という傾向までも共通していた。このころといえば、クラウスがジャン・コクトーの『恐るべき子どもたち』を翻案した戯曲『兄弟姉妹』をエーリカ、クラウス、名優グスタフ・グリュントゲンス、パメーラ・ヴェーデキント（作家フランク・ヴェーデキントの娘）の四人で主演したのがこの年の11月のことで、それ以前の1927年にエーリカとクラウスは二人で世界一周旅行をしていたし、また翌1931年にエーリカはリッキー・ハルガルテンの挿絵で『シュトッフエルの飛行船』を出版し、¹⁸ さらに1933年元日にはエーリカの劇団「胡椒挽き」が初公演を行っている。男性中心の社会に強い反発を覚えるシュヴァールツェンバハにとってエーリカは、自立していて魅力的で強い、女性の鑑だった。

マン家の人たちは皆、ナチスを嫌悪していたが、これがシュヴァールツェンバハにとって刺激的だった。シュヴァールツェンバハ家はブルジョア、母方のヴィレ家は軍人で、親族は逆にナチスに好感を抱いていた。特にヴィレ家には国を侵略から守る使命があつて、脅威と友好を結ぼうとした。具体的には1922年11月にルドルフ・ヘスが党への寄付を求めてチューリヒ近郊のシュヴァールツェンバハ家を訪問している。ヘスは目的を達したに違いない。というのも1923年8月には党首ヒトラーがチューリヒのルネの弟ウルリヒ・ヴィレを訪ねている。その際シュヴァールツェンバハ家を交えて会食しているから、シュヴァールツェンバハはヒトラーと言葉を交わしたはずである。ヒトラーのお膝元ミュンヘンのマン家が逆にナチスへの危機感一色に染まっていたのは極端なまでの対比だった。マン家に感銘を受けたシュヴァールツェンバハはナチスとの闘いを自分のものとして引き受けた。

エーリカはある時は母となり、¹⁹ またある時は姉となり、両親から自立するよう発破を掛けた。エーリカから見たシュヴァールツェンバハの欠点は、家庭や自分自身のことにはばかりかかずらつて政治に目を向けられないことだった。散漫でプライベートな領域に留まるシュヴァールツェンバハの文学世界を眺める限り、²⁰ それはまっとうな批判だったろう。ただしその文学は占有しようと

¹⁷ 生まれた年がエーリカは1905年、クラウス1906年、ローベルト＝ウルリヒ1904年、ズツァンネ1906年。

¹⁸ エーリカ・マン『シュトッフエルの飛行船』（若松宣子 訳）岩波書店 2008年。

¹⁹ シュヴァールツェンバハはエーリカとの交際の初期から、手紙の署名に「あなたの子（Dein Kind）」という表現をよく用いた。

²⁰ 彼女の小説の雰囲気はクラウス・マンの初期小説群のそれによく似ている。例えば彼女の処女長編『ペレンハルトの友人たち』の場合、マンの長編小説『敬虔な踊り』（1925）との類似性を指摘できる。どちらも芸術と同性愛がテーマで、少数の若者たちが散漫な物語を展開する。文学的傾向がよく似通っていたことがこ

迫る母親からの逃避の場だった。エーリカからの働きかけは母親を刺激して過激化させ、ただでさえ抑圧された気持ちを必死になって発散する必要のあったシュヴァルツェンバハを、さらに追い詰めた。彼女は愛する母親と愛するエーリカとの間で板挟みとなって、激しく苦悶する。

そしてシュヴァルツェンバハはアルコール中毒、麻薬中毒になる。博士号取得後に作家として滞在したベルリンで、上流家庭の躰から開放された反動からか、飲み明かし、まさに夜が明けるまでベッドに入らない乱れた生活をしていたのだが、1932年10月に親友ルート・ランツホフ＝ヨーク²¹の紹介でモプサ²²（作家カール・シュテルンハイムの娘）と知り合う。モプサの愛人、芸術家ルドルフ・カール・フォン・リッパが麻薬を入手できた。シュヴァルツェンバハは1932年11月、このモルヒネを初めて服用する。²³モルヒネ初体験にマン姉弟が立ち合った可能性すら否定できないが、そうでなくとも、すでに麻薬に溺れていたクラウドが彼女の警戒心を低めたに違いないし、エーリカがシュヴァルツェンバハ家の母娘関係を緊迫させなかったなら、エーリカという高度な目標が現われなかったなら、シュヴァルツェンバハは麻薬に溺れず済んだかもしれない。

母親に迷惑していて、麻薬中毒で危機的な状態にあつて、政治的な女性シュヴァルツェンバハの存在は、マン姉弟との付き合い無しには考えられない。ただし、姉弟にとってシュヴァルツェンバハはそれ程には重要でなく、心底理解し合うには至らなかったようだ。

4. 冒険の始まり

1933年、ナチスが政権を握り、ユダヤ人を中心に大勢が亡命した。このときシュヴァルツェンバハは、冒頭で紹介したように、亡命雑誌「集合」の刊行に尽力した。しかし彼女は編集者に名を連ねていないし、非政治的なものしか寄稿していない。そこには表立って反抗できない理由があった。

シュヴァルツェンバハ家は単に資本家としてナチスを支援していたのではなく、心情的にもナチスを応援していて、アンネマリー・シュヴァルツェンバハにもナチスへの協力が期待されていた。そこに揺らぎが生じるのは、ようやく1934年6月30日のレーム事件（「長いナイフの夜」）

の二人の信頼関係の基礎となったと考えられる。ただし、マンが亡命を境に目覚しい成長を見せたのに対し、シュヴァルツェンバハの方はあまり変化しなかった。

²¹ グスタフ・キーペンホイアー社、クウェーリッド社の共同経営者フリッツ・ランツホフの従姉妹。また、フィッシャー社経営者ザムエル・フィッシャーの姪。Miermont (2008), S.66.

²² 本名はテア（ドロテア）。同名の母親と区別して「モプサ」と呼ばれる。マン姉弟と親しく、クラウド・マンの『転回点』で作家ルネ・クルヴェルの自殺を扱った場面（第九章の最後）にモプサは印象的に登場する。クルヴェルは同性愛者だったが、彼女との結婚を望んだことがあった。Ebd., S.101.

²³ Ebd.

以降である。とりわけ母親ルネはナチスに強い共感を抱いていたし、その愛人はヒトラーから賞賛される歌手エミー・クリューガーだったから、取り付く島がなかった。

そうした状況で、亡命生活を始めたトーマス・マンが、シュヴァルツェンバハ家のあるボッケンとは幅の狭いチューリヒ湖を挟んで向かいのキュスナハトに居を構え、エーリカはチューリヒで劇団「胡椒挽き」の公演を、クラウドはアムステルダムで反ナチス文学の出版を始める。我が子への愛情と亡命者への反感から、ルネは娘を引き戻そうと必死になり、両家に強い愛情を抱いていたシュヴァルツェンバハは板挟みになった。愛する両親と親族のため、彼女にはマン姉弟のように堂々とナチスに反抗することができなかった。それで「集合」の編集者に名を連ねなかったのだが、それでも1934年6月、ゲシュタポは「扇動雑誌」である「集合」との関わりを理由にシュヴァルツェンバハのドイツ滞在禁止処分を求め、それが認められる。

この板挟み状況の深刻さを教えてくれるのが「胡椒挽き」スキャンダルである。シュヴァルツェンバハがペルシア旅行で不在の1934年11月16日、チューリヒでの「胡椒挽き」の公演に「フロント（前線）」と呼ばれる右翼グループが集団でチケットを購入して入場し、叫んだりスパナを振り回したりした。現場を指揮したのがシュヴァルツェンバハの従兄弟ジェームズ・シュヴァルツェンバハで、彼を含め二十四名が逮捕され、19日の「新チューリヒ新聞」には、エーリカ・マンは共産主義者でスイスの中立を妨害していると中傷する、彼の投書が掲載された。その後も扇動が続き、「フロント」の首領と目される人物も逮捕され、エーリカは誘拐の脅迫も受けた。警察の警備付でなければ公演できなくなり、12月にはスイスでの公演を休止した。

エーリカは母親ルネ・シュヴァルツェンバハの陰謀だと直感し、²⁴ 警察にもそう主張した。シュヴァルツェンバハの祖母クララ・ヴィレが11月16日の日記に、「胡椒挽きが襲われた、ブラボー！」²⁵ と記しているくらいだから、そうであっても不思議でなかった。しかし証拠はなかった。ジェームズは警察で、エーリカがシュヴァルツェンバハを同性愛関係に引きずり込んだ、と主張したから、²⁶ この事件の根底にあったのはルネとエーリカとの間でのシュヴァルツェンバハの奪い合いである。だからもしシュヴァルツェンバハがエーリカと同じ政治活動をしたならば、両家を一層深く傷付ける結果となっただろう。シュヴァルツェンバハは家族を安心させるため、

²⁴ シュヴァルツェンバハはルネ黒幕説を採らなかった。「フロント」は「胡椒挽き」を襲撃すればシュヴァルツェンバハ家とヴィレ家が喜ぶことを知っていたから事件を起こしたのであって、ルネの責任はエーリカへの敵意を隠そうとしなかったことだ、というのが彼女の分析だった。情報を総合する限りではそういう判断になる。

²⁵ Schwarzenbach (2008), S.223.

²⁶ エーリカは、自分は女優レーゼ・ギーゼと恋愛関係にあつて、シュヴァルツェンバハとの間にはそういう関係はない、と述べた。警察は知らなかった。ルネに同性の愛人がいて、祖母クララだって子どもの頃は将校になりたかったことを。警察はエーリカの性的誘惑がシュヴァルツェンバハ家の人間を怒らせた原因なのだと理解した。

1935年5月にフランスの外交官クロード・クララクと結婚する。²⁷

話は前後するが、1933年9月に「集合」の創刊号が出たのを見届けると、シュヴァルツェンバハは両家の争いを休止させるかのように、²⁸ 10月にオリエント急行で旅立ち、七ヶ月かけてトルコ、パレスチナ、イラク、イランなどを巡っている。これに関してはそれ以前に、1932年春からシュヴァルツェンバハとエーリカとクラウス、それにハルガルテンの四人で二台のフォードに分乗してペルシアに行く計画があった。ペルシアという目的地は1930年に小説『アレクサンダー』を出したクラウス・マンと、歴史学者シュヴァルツェンバハ博士の意向で選ばれたのだろう。この計画に、SA（突撃隊）の攻撃対象であるがゆえに舞台上に上がれなくなった女優エーリカも乗り気になった。それにエーリカは1931年のフォード社一万キロレースの勝者である。詳しい事情はクラウス・マンの自伝『転回点』（第八章の最後）に譲るが、ナチスの台頭に対する不安に耐え切れず出発二日前にハルガルテンが自殺し、実現しなかった。²⁹ だから一旦は行く気になって情報収集したことがあったので、それに作家としての成功も求めて、中東へ旅立ったのだろう。これが第一回オリエント旅行で、生涯に四度、中東を旅している。

この時、シュヴァルツェンバハ博士は遺跡や発掘現場を訪ねている。テヘランからクラウス・マンに宛てた手紙には、アメリカ人たちが発掘している現場を紹介し、「そこで秋に三ヶ月間働くことでほぼ決心がついたような気がしてます。」³⁰ とあって、実際にそうした。マンの立場に立てば、とりわけ「集合」の資金繰りに苦勞しているところに、13世紀の話や考古学の発掘の話を読まれるのだから、何を能天気な、と非難したくなって当然だろう。すなわち、マン姉弟の目には、ヨーロッパを離れることが、考古学に興味を抱くことが、逃避に思われた。しかし当人にとっては逃避でない。Georgiadouはこう解説する。

²⁷ クロード・ブルデュが縁故相手として有力だったが、1934年にシュヴァルツェンバハが結婚の意志を伝えたときは彼の母親が死の床に臥していて、彼は承諾することができなかった。シュヴァルツェンバハは1935年1月12日に自殺未遂事件を起こしているくらいで、支えを必要としていた。クラウス・マンも候補だったと思われるが、シュヴァルツェンバハ家から激しく憎まれているエーリカ・マンの双子同然の弟は、シュヴァルツェンバハ家にとって最悪の選択肢であって、彼女には選ぶことができなかったと考えられる。シュヴァルツェンバハ家はプロテスタント、クララク家はカトリックで、テヘランでの結婚式に家族は参加せず、立ち合ったのは皮肉にもイラン駐在フランス大使で、クロード・ブルデュの母方おじだった。Miermont (2008), S.157, 167, 178.

²⁸ 懸念が的中し、この旅行中に「胡椒挽き」事件が起きた。

²⁹ ただしその直後、シュヴァルツェンバハとマン姉弟は一緒に二度自動車旅行をしている。ヘルベルト・フランツを加えてベニスへ行き、後にトーマス・マンの小説『ヴェニスに死す』の舞台となるホテルに滞在し、それから三人でフィンランドへ行き、クラウス・マンの小説『北への逃避』の舞台となるハンス・アミノフ家に滞在している。

³⁰ Schwarzenbach, Annemarie: „Wir werden es schon zuwege bringen, das Leben“. Annemarie Schwarzenbach an Erika und Klaus Mann. Briefe 1930-1942. (Hrsg. v. Uta Fleischmann) Herbolzheim 2001, S.111.

アンネマリー・シュヴァルツェンバハはペルシアへのただの旅行者ではなく、つまり訪問者ではなく、この土地の広大な荒野に、没落しつつある彼女の故郷である大陸の運命を映し見て嘆く女性になる。ペルシアの山々は世界苦、故郷喪失、そして根無し草になることを表わす誇張された書割になる。彼女がジャーナリストとしてオリエントで書いた文章でも、記事を支配するのは疎遠さと喪失感だ。

他方エーリカ・クラウス・マンはヨーロッパの地で国民社会主義に抗する闘いに積極的に関わることを自分たちの絶対の使命と捉えていて、そこではトーマス・マンがドイツ亡命者たちの最も重要な人物の一人になる。この時期に広大なアジアの孤絶した場所に赴いて、1934年冬に発掘現場の風通しのよいテントで泥の中に沈んでいる滅亡した文化の残り滓を拾うというアンネマリー・シュヴァルツェンバハの行動は、マン姉弟には理解不能だった。それでこの友人関係に、二度と完全に克服しようのない疎外感が生じるのである。³¹

Georgiadou は、孤独から生み出された、根源的で汚れなきものへの憧れが、ゴーギャンンにおいては南の島に、ランボーにおいてはアフリカに向かったのと同じで、シュヴァルツェンバハの場合、クラウス・マンのようにヨーロッパのホテルで孤独を味わうよりも、オリエントに向かうことを選んだのだと解説する。³² 彼女は親兄弟たちとの縁を切ることはできなかった。それで彼女は、ヨーロッパを飲み込んでゆくファシズムから逃れること自体を闘いとみなし、中東の辺境で文明の根源を見詰めることに意味を見出す。

5. ソ連の社会主義、米国の格差社会

ヨーロッパでファシズムの嵐が吹き荒れるなか、それに背を向けるかのように中東、後にはアフリカに行ったからといって、シュヴァルツェンバハが世界情勢に無知だったとか、政治から逃避したとかと考えるのは大きな誤解である。彼女は家庭環境からして経済と軍事に明るかったのに加え、積極的に世界を訪ねていた。³³ 特に強調しておきたいのは、ソ連を二度、米国を四度訪

³¹ Georgiadou, Areti: „Das Leben zerfetzt sich mir in tausend Stücke“. Annemarie Schwarzenbach. Rekonstruktion einer Lebensgeschichte. In: Willens, Elvira (Hrsg.): *Annemarie Schwarzenbach. Autorin – Reisende – Fotografin. Dokumentation des Annemarie-Schwarzenbach-Symposiums in Sils/Engadin vom 25. bis 28. Juni 1998*. Herbolzheim 2001, S.29-46, hier S.125.

³² Georgiadou (1994), S.8.

³³ シュヴァルツェンバハの世界紀行は次の文献で概観できる。Schwarzenbach, Annemarie: *Auf der Schattenseite. Ausgewählte Reportagen, Feuilletons und Fotografien 1933-1942*. (Hrsg. v. Regina Dieterle / Roger Perret) Basel 1995.

れ、社会主義と資本主義のあり方をつぶさに観察していたことである。

1934 年夏にソ連で開催された国際作家会議に、シュヴァルツェンバハが正式な招待を受けたことはあまり知られていない。一緒に行ったクラウス・マンの付添いとの誤解が多いようだが、女性およびスイス人を代表していた。³⁴

「USSR の印象はポジティブで、いくつかの点で納得のいく見事なもの — そりゃあ、ここでは愚かなユートピアが実現されて、コロンブスの卵を頭の上に置いたようなものだけだ。」³⁵ と書かれた彼女の原稿が残っていて、これと同じ調子の手紙で資本家の父親を失望させた。まだスターリンによる粛清の嵐が吹き荒れる前で、彼女は労働者たちが小説を熱心に読む姿、ゴーリキーが、党の見解に反して、あらゆる戦争に反対したことに感銘を受けた。ソ連にいろいろ問題があっても、それはヨーロッパ諸国よりひどいということではなく、それにヨーロッパで流布されているソ連の姿は訂正で済まない根本的に間違ったものというのが彼女の印象だった。

クラウス・マンの考えは、ナチス問題の解決が根本的な解放をもたらすというもので、シュヴァルツェンバハはそれに共感できず、ヨーロッパの没落と社会主義の勃興という図式の方がどちらかというとな納得がいった。彼女はスイスに戻らず、文明の根源を見詰めるために再びペルシアに向かった。ちなみに 1937 年にモスクワを再訪してヨハネス・R・ベッヒャーと話した際に、彼の態度から、ソ連が全体主義に変質したことを知る。³⁶

また 1936 年から 38 年まで三度に分けて、米国の貧困社会について現地調査を行なっている。フランクリン・ルーズヴェルト大統領のニューディールでは、写真家のチームを編成して貧困状況の調査が行われたが、シュヴァルツェンバハはバーバラ・ライト³⁷ と二人でその手法を踏襲し、黒人の多い地域を写真に収めて回った。スイスの出版社からは作家の紀行文を期待されたのだが、彼女はジャーナリストに徹して、米国社会の闇の深さを浮かび上がらせた。³⁸ シュヴァルツェンバハ家は弟ハンスを米国に派遣して、シュヴァルツェンバハ家の工場を訪ねたこの二人のジャーナリストを断固として立ち入らせなかった。そうせねばならないほど、彼女らの写真には資本主

³⁴ 唯一のスイス人女性。他の国では妻あるいは秘書として作家に同伴した女性は少なくなかったが、作家として招待された女性は少なかった。尤も、知名度が低くて愛らしいシュヴァルツェンバハは、他の作家たちからクラウス・マンの付添いと誤解されていた。この会議については次の論文が詳しい。Georgiadou, Areti: „Die unendliche Trauer im Herzen“. Annemarie Schwarzenbach (1908-1942) in der Sowjetunion. In: Brack, Simone u.a. (Hrsg.): *Jahrhundertschicksale. Frauen im sowjetischen Exil*. Berlin 2003, S.210-215.

³⁵ Annemarie Schwarzenbach (1995), S.51.

³⁶ Miermont (2008), S.233.

³⁷ 夫クロード・クラクはシュヴァルツェンバハとの結婚以前、ライトとの結婚を考え自分の両親に紹介したこともあった。Ebd., S.189.

³⁸ Schwarzenbach, Annemarie: *Jenseits von New York. Ausgewählte Reportagen, Feuilletons und Fotografien aus den USA 1936-1938*. (Hrsg. v. Roger Perret) Basel 1997.

義の生んだ格差社会を糾弾する力があつた。シュヴァルツェンバハが、ファシズムの敵である米国を美化するマン姉弟と立場を異にしていたことは言うまでもない。

シュヴァルツェンバハはジャーナリストとしてヨーロッパ、ソ連、中東、アメリカを丹念に見て回り、社会の様々な闇に目を向けていた。彼女のルポルタージュと写真からは、社会の悪に立ち向かう真剣な姿勢が感じ取れる。彼女の表現と行動はそれだけの広い知識と体験と熱い志に裏付けられていた。しかし反ナチス活動が自由にならない状況で、焦燥感に苛まれながら、文明の根源や自分探しといった、より本質的事柄を志向する。向かう先の一つが山だった。

6. 上へ

シュヴァルツェンバハは1933年ごろから、友人たちを泊められる家を持ちたいと考えていた。それで、父親の同意を得られず購入はできなかったが、1935年1月1日よりエンガーディン谷のシルスに「獅師の家」を借りた。³⁹ 家賃負担は重かったが、シュヴァルツェンバハ家が世界恐慌後の経営不振に喘いでいて、父親に家を建てもらうという希望は最後まで叶わなかった。小道を挟んで向かいの小さめの家に移ったり、地元の牧師に家賃を立て替えてもらったり、家賃を稼ぐためにコンゴに行く仕事を引き受けたりして、なんとか死ぬまで家を借り続けた。死に至った自転車事故のときは、⁴⁰ 父方祖母の遺産でその家を購入する手続きに行くところだった。手放せない拠点だったのだ。

山との関わりを振り返ろう。幼少の頃、一家はチューリヒの街中から郊外の風光明媚な地所、ボッケンに引っ越した。子どもが五人に増えて手狭になったこと、そちらの方が父親の事務所に近かったことが理由である。遺伝的に心臓の弱かった父親は、長い時間かけて散策するのを日課とし、子どもたちを連れ歩いた。その影響があつてか、シュヴァルツェンバハは1924年からワンダーフォーゲルに参加し、1925、26年には機関誌「ワンダーフォーゲル (Wandervogel)」に三度寄稿している。彼女は青年牧師エルンスト・メルツの指導するワンダーフォーゲルを通じて批判精神に目覚めた。山歩きを楽しむ彼女が特に気に入った場所がエンガーディン谷だった。「獅師の家」を借りる前から、エーリカ・マンに宛てた手紙には、「エンガーディン、完全になじんでいるわが家で、南の暖かさと青い空がとつても素敵で、それに信じられないくらい雪原で遊べるところ」(1930年12月24日付)、「エンガーディン、他のどこよりも確実に行動できて、

³⁹ 彼女の希望通り、マン姉弟、テレゼ・ギーゼ、クロード・クララクその他の仲間たちが、シュヴァルツェンバハが不在のときにも逗留した。もちろんクラウド・マンはここで小説を執筆し、代表作『メフィスト』(1936)の題名を思いついたのもここである。

⁴⁰ 自転車で転倒した結果として死亡したのではなく、精神病治療に問題があつた可能性がある。なぜなら事故による怪我は軽傷だったし、得意の自転車で転倒したことも不可解である。この点については今後の調査が待たれる。

軽い気分でいられる私に〈ぴったりの〉土地」（1932年12月24日付）と書かれていた。⁴¹ 世界的に有名なこの景勝地を初めて訪れたのは12歳のときで、それからは年明けの数日を家族とここで過ごすのが習慣になった。1925年秋から二年間は下エンガーディンの女学校で学び、チューリヒ大学に提出した博士論文の題目は「中世および近世初めの上エンガーディンの歴史について」。⁴² 彼女はこの地に魅了されていた。

彼女にとってもう一つ重要な山地が、新婚のときに避暑のキャンプ生活をしたテヘラン近郊にある標高二千五百メートルのラル谷だが、これについては代表作『幸福の谷』およびオリエント旅行と絡めて稿を改めて取り上げたい。

1933年に書かれた長編小説『上への逃避 (*Flucht nach oben*)』が彼女の垂直志向を表わしている。この題名はクラウス・マンが翌年出版した長編小説『北への逃避 (*Flucht in den Norden*)』と似ていて、しかもマンは1932年にシュヴァルツェンバハとフィンランドに行った体験を下敷にし、主人公ヨハナのモデルも紛れもなくシュヴァルツェンバハというわけで縁は深いのだが、この『上への逃避』はインスブルック近くのスキー場のスキー教室を舞台とする全く別の小説である。彼女の処女長編小説『ベルンホルトの友人たち』が極めて狭い人間関係しか描いていなかったのに比べれば、登場人物が多い分だけ視野を広げた小説であり、政治的な雰囲気は薄いものの、反ナチス小説として見れば、リッキー・ハルガルデンを自殺へと誘った時代の風潮を捉えていた。クラウス・マンらはこの作品を評価したが、反ナチス的であるがゆえに出版できなかった。原稿は行方不明となったが、幸い1997年に発見され、1999年に出版されている。

ボッケン、エンガーディン、ワンダーフォーゲルを軸とするシュヴァルツェンバハの山は、軽い山歩きとスキーの世界である。上で紹介したエーリカ・マン宛ての手紙の内容からして、彼女は澄んだ、素朴な世界に安らぎを求めているのだろう。ところが意外にもその彼女が、数々の初登頂を記録した登山家に強く引き付けられて、彼の伝記を執筆する。一体どういう気持ちで、そこに働いたのだろうか。

7. 登山家ザラディン

スイスの登山家ローレンツ・ザラディン（1896－1936）は南北アメリカで武者修行した後、カフカスでいくつもの初登頂を果し、1936年6月、天山山脈第二の高峰ハン・テングリ⁴³ 登頂

⁴¹ Annemarie Schwarzenbach (2001), S.42, 82.

⁴² Schwarzenbach, Annemarie: „Beiträge zur Geschichte des Oberengadins im Mittelalter und zu Beginn der Neuzeit“, Universität Zürich (Dissertation) 1931.

⁴³ 当時は標高7,200米とされ、世界最北の七千米峰かつ天山山脈最高峰と考えられていた。新しい測量では標高6,995米で、万年雪を含めれば七千米超。最高峰の称号をボベータに譲った今も山容が美しさから人気がある。ヒマラヤの八千米級に相当する難しい山で、登頂したザラディンは一流の登山家だったといえる。

後に麓で病死した。その存在をシュヴァルツェンバハは1937年5月、チューリヒで知る。⁴⁴

高峰への登頂の成否を左右するのは、登山家の能力に加えて気象である。気象次第で難度は大きく変化する。遠征には数週間を要するので、天気安定する季節に挑戦するのが基本となる。ザラディンは経験豊かな登山家だったが、ソ連からのビザ発給が遅れて、有利な時期を逃した。それが彼の死の遠因となった。⁴⁵ 政治性の薄そうなこのテーマに、⁴⁶ シュヴァルツェンバハはのめり込む。スイスでタクシー運転手をしていて、ザラディンの弟から委任状を受け取ると、遺品を引き取りにベルリン経由でモスクワへ行く。独ソ不可侵条約より前のことである。モスクワで生き残った隊員たちの話を聴き、ザラディンのカメラで撮影された千二百枚のネガと彼のメモを入手した。その後ストックホルムからクラウス・マンに宛てた手紙には、ザラディンについて、「彼の名前は私の意識の中で大きな、そして全くもって活き活きとした役割を演じています」（1937年6月2日付）⁴⁷ とその影響の大きさを記している。山登りが全てという登山家の何が彼女の琴線に触れたのだろうか。

このモスクワ行きの成果である伝記『ローレンツ・ザラディン ― 山に捧げた生涯』（1938）は、シュヴァルツェンバハの生前に最も売れた著作だが、後に入手困難となっていた。しかし山好きの作家エーミール・ツォプフィによって蚤の市で古本が発見され、2007年に再刊されている。これは登山家の自伝と遜色ない的確な表現で仕上げられていて、著者シュヴァルツェンバハが登山技術その他を十分に理解していることがわかる。彼女のように山並みを望む高原に住み、辺りを散策するのと、登山家として頂を目指して攀じ上るのは確かに別物だが、アルプスは、日本版のそれと違って、アルプと呼ばれる草原が広がり牧畜が行なわれていてアブローチがよく、山登り（klettern）より容易な山歩き（wandern）の範囲は日本におけるよりも遥かに広く、両者の世界は隣り合っている。⁴⁸ だからシュヴァルツェンバハにも、ザラディンの生きた世界を理

⁴⁴ それが本人の主張だが、ところが1936年6月22日付の「チューリヒ画報」にシュヴァルツェンバハとザラディン両方の顔写真が同じ頁に掲載されている。Schwarzenbach, Annemarie: *Lorenz Saladin. Ein Leben für die Berge*. Herausgegeben und mit einem Essay versehen von Robert Steiner und Emil Zoppi. Basel 2007, S.248f.

⁴⁵ 寒さの緩む時期を逃してしまったこと以外にも、失敗の要因はいくつも挙げられるが、高所順応が不足していたがゆえの高山病が大きな近因だろう。ただし、早く入山できていたなら、高所順応に時間を割いたに違いない、やはり寒さが深まってゆく切迫感が登山隊を死のスパイラルに追い込んだと思われる。

⁴⁶ 高峰への登頂は国の威信を賭けた事業だったので、実際は政治と深く関わり、ザラディンの死についてもソ連側から参加した隊員に暗殺されたとする説が根拠があったが、シュヴァルツェンバハはそうした側面に興味を示していない。

⁴⁷ Annemarie Schwarzenbach (2001), S.158.

⁴⁸ ここでは山岳部とワンダーフォーゲル（ワンゲル）部の違いのようなことが問題なのではない。日本の高山は深い森と森林限界の荒野とから構成された人里離れた分け入り難い領域だが、ヨーロッパでは森林限界を越えたところまで牧畜の行なわれる里山の領域で、麓から日帰りで歩ける範囲が格段に広い。山の有り様が

解できたのだろう。

しかし理解できたにしても、やはり山歩きと山登りは違うし、ましてヤザラディンのそれは極限への挑戦である。彼の何を評価したかが、彼女の内面を映し出す鏡となる。彼女の関心の所在は次の箇所から読み取れる。⁴⁹

ずば抜けてエネルギーが豊富だったけれど、彼に並外れた才能があったと主張する人はきつといない。しかし彼は山のために生きた。彼にとって人生を意味した山という媒体によって生きた、と言えるかもしれない。彼の信仰告白の素朴さ、生き方の一貫性はどんな批判も寄せ付けないし、解説しようとするどんな試みも矮小化になってしまふ。⁵⁰

過酷な山登りに付きまとう山への一途さへの感嘆は、「山に捧げた生涯」という副題にも表れている。すでに見た通り、逆にシュヴァルツェンバハは多才だった。歴史学者で、小説家で、フォトジャーナリストであったし、若い頃は、痙攣のため断念したが、ピアニストにもなれそうだったし、ダンスでも非凡な才能を見せた。乗馬でもそこそこ活躍した。山が全ての登山家は彼女と正反対だった。

世界中のアルピニストたちに名前が知れて、もし紀行文を書いて写真集を出版して欲しいと求められたなら、彼はその至極当然の名声を存分に利用し堪能することができたはずだった。今では馴染みになって、登頂して名を付けるべき頂がまだ沢山あるカフカスに引き返すことも容易に可能だったはずだ。カフカスはザラディンにとって確かな投資のようなものになり得たはずだった、彼が財産と安定に意味を見出しさえしたなら。しかし彼はそんなことを考えなかった。かつてローレンツ・ザラディンを「徒歩旅行者気質」と呼んだ人がいる。この表現は少なくとも今どきの一部の老年スイス人の特性を言い当てているから、ザラディンにも当て嵌まるかもしれない。彼はどんな企画にも新たなやる気と新たな勇気を見出し、長く苦しむことなどなかったのだから。

異なる。

⁴⁹ ツォプフィはシュヴァルツェンバハが写真家の立場から、ザラディンが撮影した写真の芸術性と民俗学的価値を評価したと考えている。しかし彼女の書いた伝記は写真ではなく彼の人格に注目しているし、民俗学的興味であれば、自分で撮影して回ったことだろう。ツォプフィの説明は不十分である。Annemarie Schwarzenbach (2007), S.249.

⁵⁰ Ebd., S.95.

小説家としては成功しなかったシュヴァルツェンバハは紀行文を書き、それに自分の撮影した大量の写真を添えた。親の財産にも頼っていた。家族を気遣うせいで、マン姉弟のように堂々と反ナチス活動を行うことができず、『上への逃避』も出版できなかった。つまりザラディンについてここに書いたことは、彼女自身のあり方の裏返しである。⁵² シュヴァルツェンバハはザラディンの生き様を振り返りつつ、自分を見詰め直していたのだ。山という馴染みの世界で繋がっていたからこそ、彼女と正反対のザラディンが特に印象深く、資料収集に突き動かされたのだろう。

ザラディンの伝記が書き上げられたのは、翌1938年の麻薬中毒の隔離療法中のこと。米国の貧困状況のルポルタージュの仕事のため彼女は疲れ、麻薬に溺れていた。にもかかわらず彼女の活動は目覚ましいものである。3月、併合されたばかりのオーストリアに乗り込み、「胡椒挽き」のピアニスト兼作曲家マグヌス・ヘニングを連れ出すと同時に、亡命者とオーストリア国内の抵抗者との繋がりを作ることを試みる。ミュンヘン会談の9月にはブラハをルポルタージュする。スイス航空が特別機を用意して彼女を含むスイスのジャーナリストたちを帰国させたというその結末から、緊迫の度合いが知られる。そして翌年には自らハンドルを握りアフガニスタンへ行き、そこで第二次世界大戦の勃発を知る。ザラディンの生き様に刺激を受けて、必死に行動したように見える。

彼女の最高傑作といえるであろう長編小説『幸福の谷』の執筆を始めたのも、1938年秋、『ローレンツ・ザラディン』出版後のこと。『幸福の谷』での孤独な、底無しに切ない自分探しの堂々巡りには、孤高の人ザラディンに対する引け目が潜んでいるのだろう。例えば次の引用は主人公が発掘の仕事辞めた後の場面である。

君たちは問う、

「何を目標にしてるんだい？」

私は訂正する。鷹や猟犬を使って追跡できるような目標は私にはないのだと。

さらに私は付け足す。私は恐れることを学ぶために出かけただけなのだ。

すると君たちは私に警告する、

「君はぼくたちの礼儀作法や慣習から外れている。考えてみろ、人は拠りどころを必要としている。だから道徳が発明され、神官に権威が与えられたのだ。気づくんだ、

⁵¹ Ebd., S.113.

⁵² ツォプフィはそれを労働者階級と資本家階級の差と理解する。その差が土台なのは事実だが、しかしシュヴァルツェンバハが注目しているのはそこではない。Ebd., S.255.

罰せられないはずが … これは君の幸福に関わることだよ」⁵³

シュヴァルツェンバハは「私たち」、「君たち」が誰を指すのかを曖昧にするのを常套手段とする。⁵⁴ この「君たち」は主人公の内面の声と考えればよいだろう。ここには多才であるがゆえに目標を定められない主人公のあり方が否定的に描かれている。掘りどころの無さに苦悩する主人公の対極にあるのが、一つの目標に没頭できる人間である。シュヴァルツェンバハの念頭にはザラディンの姿があったに違いない。

山は登山家にとって目標である。それも、自然の脅威に身を晒す過酷な世界だけに、全力を尽くすことを要求される目標である。しかし、シュヴァルツェンバハにとっての山は、それと正反対に、羽根を伸ばす場所だった。エーリカ・マンのように行動できないことに悩んでいた彼女は、馴染みある山歩きと陸続きの世界にある山登りに人生を捧げたザラディンを知り、自分の限界を超えるきっかけを掴んだ。それでも彼女は自身を克服できなかったのかもしれないが、そこを巡るせめぎ合いのなかで『幸福の谷』という優れた小説が生まれた。山はシュヴァルツェンバハを癒し、彼女を行動へと誘った。

⁵³ Annemarie Schwarzenbach (1987), S.77.

⁵⁴ Henke, Silvia: Annemarie Schwarzenbachs Prosa zwischen Fremde und Entfremdung. In: Fähnders / Rohlf (2005), S.139-152, hier S.147.

Der antinazistische Widerstand von Annemarie Schwarzenbach

— In Verbindung mit Erika und Klaus Mann, sowie Bergen —

TAKEDA Yoshiki

Seit 1987, der Wiederentdeckung der Schriftstellerin Annemarie Schwarzenbach, entwickelt sich die Forschung über diese Schweizerin. Früher hielt man sie für eine reiche Dilettantin, die die exilierte, deutsche Literatur bloß mit Geld unterstützte, nun hält man jedoch für eine antinazistische Kämpferin. Obwohl Schwarzenbach sowohl die Tochter des Kapitalisten, Enkelin des Generals und Doktorin der Universität Zürich war, als auch musikalisches, motorisches und literarisches Talent hatte, wollte sie nicht vor der faschistischen Welt in ihren Privilegien zurücktreten, sondern kämpfte bis zur Erschöpfung gegen den Nationalsozialismus. Ihr politisches Engagement ist daher sehr bemerkenswert. Im vorliegenden Aufsatz wird dieses in Verbindung mit Wandern und Klettern betrachtet, da sie ihren Hauptsitz in einem ruhigen Jägerhaus in Engadin hatte und dazu noch vom schweizerischen Bergsteiger Lorenz Saladin tief beeinflusst wurde.

Die Familie Schwarzenbach war Bourgeoisie, militärisch und auch pro-nazistisch, weshalb es Annemarie Schwarzenbach sehr erstaunte, als sie die antinazistische Familie von Thomas Mann kennenlernte. Wegen der Schwarzenbach ähnelnden Geschwister Mann, Erika und Klaus, wurde sie eine antinazistische Kämpferin. Das war nicht leicht, weil die Familie Schwarzenbach, besonders die lesbische Mutter, ihre schöne Tochter den Geschwistern Mann nicht unbedingt überlassen wollte. Da gab es heftige Konflikte, wie z.B. der Pfeffermühlen-Skandal. Um diese Konflikte mäßig zu halten, sollte Schwarzenbach nicht entschieden wie Erika Mann sein. Schwarzenbach suchte ihren Kampf im Orient. Ihr Gedanke war so wesentlich, wie ihr die Ausgrabung in Nahost einen Kampf gegen den Vernichter der Zivilisation, und zwar den Nazismus, bedeutete.

1937 hörte Schwarzenbach vom Bergsteiger Lorenz Saladin, der nach der Besteigung Kahn Tengri gestorben war. Sofort fuhr sie nach Moskau und brachte Saladins Nachlässe in die Schweiz. Warum gab sie sich für den Bergsteiger so große Mühe? In ihrer Biografie über Saladin, deren Titel „Ein Leben für die Berge“ lautet, lobt sie seine Konsequenz, und zwar dass er nur ein Ziel, das Bergsteigen, gesucht hatte. Im Gegensatz dazu hatte Schwarzenbach viele Talente und somit viele Ziele, weswegen ihr ein Halt fehlte und großer Erfolg ausblieb, und sie sich unglücklich fühlte. Sie nahm sich den einfachen Mann Saladin zum Vorbild eines tuenden Manns. Nachdem sie das Leben Saladins gekannt hatte, fuhr sie ins, von den Nazis eroberte Österreich und Tschechien und arbeitete dort als Antifaschistin. Durch Saladin fand sie den Mut, den Nationalsozialismus zu bekämpfen. Also schenkten ihr die Bergen sowohl große Ruhe als auch tapfere Taten.